

## 自然法爾について

和田 真雄

親鸞における自然の語は、意味の上からおよそ三種に分けられる。第一は、涅槃・浄土を自然とするものであり、第二は、本願力の働きを自然とするものである。第三は「一念信心をうる人のありさまの自然なること」と言われるように、信心獲得の衆生を自然とするもので、自然法爾の自然である。

このように三種に大別される自然の語は、それぞれ自然とは言われるけれども、決して同一の概念を指している訳ではない。自然の語の意味は、「他によらないで、それ自身に内在する働きによってそうなること、又そうであること。」<sup>①</sup>と言われる。涅槃・浄土・本願力が自然と言われるのはこの意味からで、独立自存し自足円満する存在であることを表わすものと理解されてきた。

しかしながら、衆生を自然とする自然法爾の用例に関しては、先の自然の意味を即座にあてはめる訳にはゆかない。それ故、自然の語義を再検討しなければならぬのであるが、この時手掛りとなるのが、漢語の自然に対する和語・和訓の「おのずからしかる」の意味である。両者はいささか意味を異にしていることが指摘されている。丸山真男氏は、

漢語の自然が人為や作為を俟たぬ存在だという意味では、それは nature と同様に「おのずから」の意に通じている。けれども自然にも nature にも、ものごとの本質あるべき秩序というもう一つの重大な含意があるのに対して「おのずから」

は、どこまでも、おのずからなるという自然的生成の觀念を中核とした言葉であつて事物の固有の本質という定義にはもともとなじまない。<sup>②</sup>

と、和語の「おのずから」には、ものごとの本質あるべき秩序といった究極的理念を内に含んではいない。即ち、漢語の自然の「他によらないで独立自存する」という究極存在を表わす意味がないと言われる。そして「おのずからなる」の中核概念は、「自然的生成の觀念」であり、丸山氏の言によれば「有機物のおのずからなる発芽成長増殖」を想起せしめるものであるとされる。即ち、草木が芽を出し成長し花を咲かせるといった「あるがままに成り行く姿」が、「おのずから」の第一義として考えられなければならないのである。

親鸞の自然法爾に先だつ用語例として指摘される『愚管抄』の「法爾自然」を見ると、「人ノ運命モ三世ノ時運モ、法爾自然ニウツリユク事ナレバ……」とあり、「ウツリユク」ありさまが自然と語られている。親鸞が「不可思議の利益にあづかること自然のありさま」と言い、「一念信心をうる人のありさまの自然なること」(一念多念文意)と言う時には、「おのずから」即ち「ありのままの姿で成り行く」の意味で使われていると考えられる。

そしてさらに、衆生が「ありのまま」なるありさまを持つというのは、「この如来のおんちかいたるがゆえに、しからしむを法爾という。」(末燈鈔)と、その根拠が示されているように、如来の本願によるものである。信心を獲得した衆生が、「ありのままで成り行く」ありさまを持つということは、大慈悲の働きの具体的なあり方を表現するもので、善惡淨穢を問わず、一切衆生を平等に摂取する如来の本願大慈悲の働きを、衆生をありのままの姿

で撰取する働きであると明らかにされたのである。

如来平等の大慈悲によって、衆生が「ありのままの姿」で撰取されるのは、『歎異抄』に

わがはからはざるを、自然ともうすなり。これすなわち他力にてまします。しかるを自然ということの別にあるように、われものしりがおにいうひとのそうろうようしうけたまわる。あさましくそうろうなり。

と言われるように、決して現在のあり方を離れた特別な何事かではない。今現在のあり方そのままが「ありのまま」なのである。現実には清淨真実なる如来浄土によって不浄不真実と否定され、真に依るべきもの、確かなる立場というようなものがあり得ないとされるのである。そのような現実であるが故に、一切衆生を救わんとされる如来平等の大慈悲が、現在ありのままを撰取されるのである。それによって衆生は、現実の内には依るべきもの確かな立場は決してあり得ないという自覚と共に、確かなる何かを求めようとする考えからも解放される。

しかしながら、現実の内には確かなる立場の確立はあり得ないと自覚せしめられ、それらを追究する思考からも解放されたとしても、そのように自覚し解放された自己を、真に如来本願に相応した自己として自己肯定するならば、それは尚「計いなきありのまま」ではないと言わなければならない。

「計い」とは『末燈鈔』第十通に

一念發起信心のとき、無碍の心光に摂護せられまいらせ候うゆえ、つねに浄土の業因決定すとおおせられ候う。これめでたく候。かくめでたくはおおせ候えどもこれみなわたくしの御はからいになりぬとおぼえ候う。

と説かれるごとく、たとえ教説の理解が正しくても「それでよし」と自己を肯定できる何かとして信心を自己分別し追求するならば、それは「計い」なのである。そこで「計いなき」とは、現実の内に絶対的境地や純粹なるあり方を設定して、それを追究するという意識から離れることであると言えよう。言い換えるならば、自己を何らかの形で自己肯定しなければ決して安心できないという、そのような自己肯定をしたいという心から離れることである。

『唯信鈔文意』に

自力の心をすつというのは(中略)みずからが身をよしとおもふところをすて、みをたのます

と説かれるように、自己肯定の心を捨てることが他力であり「計いなき」なのである。

しかし尚、それでは捨てた自身を肯定することが起る。そこでより正確には、現在ありのままが如来によって撰取され、正機として願われてあるという実感によって、「これでよし」又「真に本願に相応した」と自己を肯定しなくてもすむ心となるということである。

このように、如来の大慈悲を、不浄不真実なる衆生をそのままありのままに撰取し往生せしめる働きとして開顕された自然法爾は、現実における一切の肯定を離れ、自己をも肯定しなくてもすむ場を開いたのである。このことによって、相依相対であり真に肯定されるべき何物もない現実の内にあつて、何物も肯定することなしに現実を相依相対の世界として生きる道が開かれたのである。

〈註〉① 「無の思想」13頁 森三樹三郎著

② 「歴史意識の古層」31～32頁 日本の思想6所収 丸山眞男著